

試験，調査，講義での話

石黒靖彦*

大学で初めての試験は、今でもはっきりと覚えています。山内先生の「堆積学」でした。というのも、試験の前日に何をしていたのかは良く覚えていませんが、かなり遅い時間に下宿に帰ったように思います。そのまま寝てしまい、起きたときには9時を過ぎていました。寢床で今日何かあったなと思った瞬間、「あっ、しまった」と思いだし、急いで大学へ行きました。既に試験を終えた人たちとすれ違いながら教室に入り、山内先生に「あの一、すいません…」と、話したところ先生は「仕方ないな一」と言いつつ問題と答案用紙を快く渡されました。確か「良」を頂いたように記憶しています。【ありがとうございました！】余談ですが、それ以来目覚まし時計を2つ用意して寝るようになり、今も続けています。

大学生活にも慣れ、試験も色々と受けましたが、飯泉先生の試験では、突然先生が教室から出られ、すぐ近くの準備室の方でおおらかな笑い声が聞こえてくれども、姿はいつまでも見えません。「しめしめ」と思い、友達と顔を見合わせて机の下に置いていた本やノートを机の上に出して、せっせと答案を書いたことを覚えています。火成岩関係の試験だったと思いますが、苦手だったのでたいへん助かりました。【ありがとうございました！】

飯泉、山内両先生には、試験ばかりでなく、野外調査でもたいへんお世話になりました。勿論、地質の勉強も含めてですが。飯泉先生には、確か2年の時だったと思いますが、メソ団研に参加させてもらい三瓶山周辺の火成岩の調査に同行させてもらいました。宿泊は農学部(当時)の演習林の施設でしたが、夜は採取したサンプルを前に先生や先輩方の議論を聞いていましたがさっぱり解らず、早くこういった議論に加わりたかったのです。夜でもありアルコール片手の議論でしたので、次第に話題が研究から離れて酒の勢が増してきたため、酒を苦手とする私は先輩方から注がれないように逃げ回っていました。そういったこともあってか、同窓会などでお会いしたとき、話題が途切れると先生に「石黒君は、いつもからかわれていたなあ」と今も言われています。

また、山内先生には、授業ではありませんが鳥取から益田まで山陰地方の第三紀層の調査では何回となく野外で直接指導して頂きました。特に、鳥取は自分の地元と言うこともあり、鳥取大学との共同調査に5、6回参加させてもらいました。夏と春にあったのですが、3月下旬でまだ雪が残る山を山内先生と越えたことがありました。そのときは、沢は雪解け水で冷たく倒木に足を取られながらの踏査となりました。私はたいへん疲れましたが、先生は岩石の観察に記載にと至ってお元気であったように覚えています。

飯泉先生、山内先生ともしゃべり方とか言い回しに特徴があり講義やゼミでは内容そのものもですが…と言うよりも、先生の話し方を楽しく聞いていました。飯泉先生はゆったりとした抑揚のない言い方で話されていました。講義のときにたくさん表をコピーしたプリントを見ながら、「ちょっと一、そのぎゃーくにっ(逆に)、なっている表を見てください」と言われプリントをひっくり返しながらか講義を聞いたことがありました。これは、先生がコピー機の上に表を適当に並べてコピーしたので1つだけ上下が逆のままコピーされてしまったのでしょう。飯泉先生はそうした細かいことは気にされていないようでした。山内先生は、何のときか良く覚えていませんが「(プリントを前にして少しせわしそうに) ちょっと一、その見えにくい所を見てもらうと良くわかると思うのですが…」と言われ、一瞬何処を見ればいいのかと迷いましたが、その

* (株)エイトコンサルタント(昭和58年度卒)

言い方が何とも言えなくつつい可笑しくなっていました。それと、何かの発表会だったと思いますが、「(黒板に張ってある図表を捜しながら) えっとー、ここにーは、書いてないんですけども…」と上手くかわされていたことを覚えています。山内先生は飯泉先生と対照的にややテンポが速かったように感じました。

私が入学したのは昭和 55 年で理学部の 3 期生、当時の 4 年生が最後の文理学部でした。文理学部では地質の学生は 1 学年 5, 6 名であったようですが、理学部になると 30 名と多くなりました。それに伴い地質学教室の各講座や研究設備も充実してきましたが、まだ文理学部の頃のこぢんまりとした雰意気も残っている過渡期的な時期だったのかもしれませんが、先生方を身近に感じながら楽しい学生生活を送ることができました。

卒業して 20 年近く経ちますが、当時と比べ現在の立派な建物や研究設備を見ると隔世の感があります。在学時には地質学教室は 3 階建ての古い建物(当時旧理棟と呼んでいた)にしかなく、薄暗くて最初はあまり良い印象を持っていませんでした。専攻科も含めて 5 年通いましたが、〇回生部屋と称するたまり場のような部屋をもらい、そこで地質の雑談や時にはおでん、鍋物を囲んで遅くまで学生同士で互いに語り合っていました。次第に愛着も湧いてきて、とても居心地の良い教室でした。文理学部時代からいらっしゃった飯泉先生、山内先生はずっと教室の変遷を間近で見られて、また、その発展のために尽くされ、今日の地質学教室を築いて来られました。入学してからずっとお世話になってきた両先生が御退官になるのは残念でなりません。

現在、先生に教えて頂いたことを生かしながら地質関係の仕事に携わっています。これからも、是非楽しくご教授頂けたらと思っています。つつい勝手なことばかり書き連ねてしまいましたが、ご退官後もますます活躍されることを心からお祈り申し上げます。